

安積良齋と関係の

徳山藩士等

会 員 清 木 素

安積良齋の生涯略伝

福島県郡山、安積国造神社の神主安藤親重の三男、安藤祐助が本名、江戸留学以後姓を安積と改む。別に名は信、字は思順といひ良齋と号した。良齋は寛政三年（一七九二）三月二日生れ、少年時代から読書を好み、江戸に出てから朱子学をきわめ、六〇歳の時、昌平黌の教授となる。徳川末期の漢学者であるが、実は日米・日露外交史をかざるかくれた功労者でもある。

良齋の生れた頃の郡山は、淋しい奥州街道の一宿場で、人口千五百人位、戸数二八〇戸位であった。

一七歳の時学者として身を立てようとして江戸に上った。道中で一緒になった日明という僧侶の情にすがり、当時江戸随一の儒学者であり、朱子学の大家佐藤一齋の学僕となる。その後二〇歳の頃林述齋の門をたたいて更に朱子学の

研究をつづけた。当時の学生はこぞって朱子学を研究したものであった。

文化一一年（一八一四）二四歳の時、神田に「見山楼」という塾を開いて独立した。

文章が巧でまた独創に富んでいたため、良齋の美文麗句は天下の書生のおこがれのまゝであった。良齋は二八歳の時結婚し一女四男家庭は極めて円満であった。門人も増加し二二八二名にも達したという。

この良齋を慕って上京した徳山藩士には、青木西峰がいる（資料(4)参照）。

良齋の門人の中で著名の防長人は楳取素彦（萩藩士後男爵）・庄原篁墩（徳山藩士。良齋・佐藤一齋に従学。後に江戸に塾を開く。通称は文助。良齋の義弟）・吉田松陰・高杉晋作・宍戸璣（山口）等がある。又、直接ではないが、次の墓碑の碑文を依頼されて書いている。

- ・ 孝女の阿米の碑文は良齋で書は中村春秀（資料(1)）
 - ・ 太華本城先生碑銘文は良齋で書は中村春秀（資料(2)）
 - ・ 巢雲浅見先生墓の撰文は良齋で書は植崎遂（資料(3)）
- 植崎遂は新南陽市山崎八幡宮の本殿の東にある乾庭の「築山の詞」の石碑の書は植崎遂である。

直接には教を受けていなくても、こんな有名な学者に碑

文を撰んで貰うことは光栄の事であった。阿米などは、本城紫巖先生・与謝野鉄幹の文章を参照にして撰文されたものと思われる。昌平齋の教授安積良齋との藩の密接な関係を読み取ることができる。

又長州藩毛利侯（三六万石）からは年一五人扶持、即ち約二〇石、徳山藩毛利侯（四万石）からは五人扶持の謝金を補助していた。良齋に対して謝金を出していたのは毛利藩と今治藩の久松侯から五人扶持、二本松丹羽侯から五人扶持となっている。距離的には離れていても、こんな大学者に藩として謝金を出し、良齋を師と仰ぐ者に取ってその様な心配りして奨励していた。藩としてかくも文教政策に強い関心を持っていたことは特筆すべきであろう。

資料(1) 「孝女阿米碑」

「江戸昌平学教官安積信撰徳山中村春秀書目 古孝女貞婦 彪炳青史者不殊簪纓家有之往々出閭巷之間 此固非有伝姆君導之法非有詩書彫管之教而守道保節確然不動蓋稟天地純粹清淑之氣有以全其秉彝之性而不為私欲所汨乱故以俾弱之姿顧能如此吾於孝女阿米尤有深感焉孝女姓氏不詳。阿米其名。周防徳山橋本街人。父称金左衛門 母河内村茂左衛門女。六歳喪母家素貧父託

孝女於外舅傭作自給。後罹疾召還孝女佐生理年甫十二。孝女日為鄰里舂軀小力微薄石於腰以舂夜則紡績達旦。僅得錢養父。父疾久而不瘥精神昏眊屢欲投水。孝女防護不離側。夏不慚冬不妒。夜不解帶女紅所得躬不費一錢。父所嗜必買而供之。務承歡心。父雖貧而病亦怡々如也。文化四年二月藩侯聞之賞賜米一苞。孝女感喜益竭力。而疾終不已。及欲詣弘法師靈跡禱之載父航于四国或負或扶掖巡拜禮瞻八十八寺。觀者感動頌与貨物逆旅不取宿蝕。因得遍到而毫無驗鄰保勸孝女納壻孝女恐其不得專干侍養也。辭之。鄉党噴々称孝。十三年閏八月藩侯又命歲賜米一苞終父身明年六月比舍失火孝女負父走出家具悉為煨燼。有中屋権右衛門者深憫之飯以房舍天保三年三月藩侯賜米一苞。調之既而父疾弥篤不欲飲食。孝女憂戚問所欲。傾楮囊求之。奉養備至遂不起。年六十八孝女亦已四十二歳。哀慕啼哭如嬰兒然。窀穸之事頗能整飾。柩于徳心寺亡母之墓。孝女自幼養父三十一年零丁孤苦難楚万状至此貧益甚。権右衛門以聞。藩侯側然賜米一苞。孝女得以立父母碣。喜甚寒燈冷壁勤女紅如故。嘉永四年

藩侯巡視封内。賜窮民召孝女。賜錢若干。後又下令使窮民願告。鄰里勸孝女讀賑。孝女曰父臥。病國君屢賜穀。恩德無量。今父既沒。妾寧餓死。不敢請也。藩侯聞之。賜米若干。孝女泣曰。國君其神乎。閭巷寒窶老婦。國君何以知其狀。而恤之。妾亦何以得之。苟浪費此米。慢慢神明也。乃托權右衛門待之。明年俄遭疾。權右衛門大驚。延醫診之。孝女拜且謝曰。妾承君之鴻庥。而不能報。錙銖宜入地。無久悞君為也。但願妾死葬父母墓側。語畢不服藥。閱二日而逝。年六十二。實嘉永五年三月四日也。孝女性婉順。為人所愛。而中毅然不可狎。粗衣荊釵。未嘗近蕪沢。而姿儀可觀。少時有人挑之者。輒頰爾大怒。挑者駭走。孤居數十年。清心玉映。老而益堅云。權右衛門從遺言。葬德心寺父母之兆。藩士林正。謙井上。光弼感其至性。起墳塚。而本城斐為之。傳。藩老侯乃侯偶聞其傳。感歎不已。命有司曰。孝女之孝。至干此。而吾不能審詳。竟使窮死。其能無愧乎。丞建碑其閭。以旌懿行。庶幾慰諸泉下矣。乃命信為之文。嗚呼。孝女貞婦之在世。如祥鸞瑞鳳。其風声所及。可以扶植綱常。可以興起人心。故藩侯之於孝女。生也矚之。死也表

之。洵可謂盛德之事。矣。願信謙陋不足彰之。然侯之命不可辭。因叙其概畧。俾天下之為女子者取範焉。

万延元年歲次庚申十一月庚寅朔二十八日丁巳建。これは約十年前拓本を取って写したものであるが、
は戦争中焼夷弾攻撃のため破損し不明になった所元の資料で補字したものである。現在は碑文の下方三、四行破損のため不明になった。

思うに、阿米は死して後、安積良齋に碑文を書いて貰うなど夢にも思わなかつたであろう。

弘化三年（一八四六）小川乾山・飯田竹塲らの主唱により学館に釈菜の制が設けられた（会誌第二号四七頁参照）。藩主の在国中年一回実施し、式後には、長寿者・孝子各一名宛講堂の縁側に上つて拜礼を許され、各々鳥目二百文・百文を賜わる例になっていた。

現在この孝子表彰制度は継続され「阿米賞」として数百年に及んでいる。

時移り星変つても、親を大切にすること、洋の東西を問わず、貧富に限らず、人間として最も自然の心情に違いない。この美風は、故郷に生かさされつ、後に続く後輩に若い力を伸長させ、文化のかおり高い郷土建設への行

手を照らす聖火ともなつて燃え続けることであろう。

資料(2) 「太華本城先生墓」

「徳山文学之行旧矣、而其昌明煥發蔚然爲文獻之邦、則實自紫巖先生始、嗣子太華先生、亦克繼箕裘、其所以教子弟者甚至、由是、經明行修之士多出干其門、文学益以盛而遺捐館舍、誠可惜也已、莊原懿持小川謙所撰状事、屬余請銘、乃掇其状、序而銘之、序日先生諱訥、字伯毅、本城氏太華其號、幼受^三學於^一家庭^一甫弱冠補學生、寛政庚申遊肥後、從紫溟高本翁學、又遊、筑前入南冥龜井翁之門、二翁竝加激弊、爲都講、儕輩咸推服、雖齒稍長者、不敢以鴈行進也、其所與交者、村井椿壽、龜井雲來、柴碧海、倉成龍渚之徒、皆一時知名士、迭相磨^レ琢、才學彬々如也、亨和癸亥紫巖先生歿、服闋、侯追賞先考積勞、加賜祿若干、拜句読師兼助訓導、後累轉爲助教、增月俸、今侯之在儲闈也、召至江戶、兼侍読、眷遇頗優、先生^亦竭^力、啓沃多裨益、其還自江戶、撰教授事、又增祿、進班一級及、儲君嗣封、嚮所加之班秩世之、天保癸卯罹疾、久而不瘥、遂以翌年甲辰十月二十九日、易簣、享年七十、空城南圓究寺祖塋之次、先生博^二涉^一經史^一、尤邃於詩、每上講席、首吐琅然、闡幽析微、諸生私相語

曰先生説詩、使人意會神領而不知倦、奚啻解頤乎哉、性闊達接物以至誠、有急輒赴之、惟恐不及、故人皆敬愛之、其學行如此。洵無愧於爲紫巖先生之長子矣、配奈古屋氏、生二男二女、三子皆夭、独次子祐吉稍長、有才學、年十九亦瘍、因養甥斐爲嗣。銘曰、彪之有固、談之有遷、堂構肩荷、弗忝厥先、生也爲一藩所矜式、俊髦盈門、死也爲一藩所惋惜、流芳永存、長松之下、清風謖々、嗚呼是太華先生之墳、弘化二年乙巳冬十二月

東奥安積信撰 門人 中村春秀謹書

繼述院幹譽有光居士

本城太華先生の墓の碑文と筆者が、阿米の頭彰碑と同じであることも不思議な因縁であると共に徳山藩と安積良斎との親密な関係を忘れることは出来ない。

同一の市に昌平齋の教授の撰文が浅見巢雲墓碑と合わせると三人も存することは、当時徳山藩士が江戶に出て昌平齋との深い関係があつたことも想像に難くない。

藩主の文教への関心もさることながら、天下に知られた師を求め勇躍江戶まで遊学した徳山藩士達の求道的の意欲を振起させたのは師匠との出会いによって体得した感動であつたと思う。七〇歳に近い賀茂真淵と三〇歳余りの本居宣長の松坂の一夜での一回の出会いが、両人の向學心を燃

焼させ、万葉考・古事記傳が我が国文学の上に不滅の光を放っていることが想い出されてくる。

すばらしいものとの出会いが人間を変えることを思うとき、故里の先輩たちも苦勞ではあったが何人も味わえないような邂逅の幸せを感得したことであろう。

資料(3) 「巢雲淺見先生墓」

「巢雲翁既歿三年、嗣子正祐、寄本城斐所作行述、乞余銘其墓、因擷其要而叙之曰、翁生而英穎七歲作擘窠字、父奇之、授以書法、及長慨然自奮曰、現今文人蔚興、皆以秦漢自期、唯書法不振、吾將摩鐘王之壘也、乃取古法帖、沈涵精習、窮晝夜不措、會備前武元景文翌、景文書唱魏晉、翁從受其訣而筆法未枳然、後遊長崎、親睹瀆客寫字、慄然超悟、參之道風空海筆意、皆吻合、於是自信益篤、自勵益至、遂有所得焉、然後縱橫揮灑、變化百出必手相應、試之二王諸帖、莫不如意、乃唱曰、吾獲千古不傳之秘矣、翁楷行皆道美、草書尤環琦特絕、有渴驥怒貌之勢、觀者擊節歎賞、故雖身塊處一方、而聲華隆々震中州矣、翁容姿魁梧、性沈靜無疾言、遽色孝于父母、太孺人年八十猶健、每侍版輿、遊宴極其歡心、家事諉內人刻意文史、嘗構亭、數椽、鑿池、植燕子、花日偃仰其中讀書

臨帖、悠閒自得、不知身在官途也、遇良辰美景、輒邀文人韻士、緇納之徒、置酒談笑、賓朋酣嬉、歌呼取快、翁雖累數十觥、不亂、鼓琴一再行、有晋宋間風韻其爲人如此、其書安得不精妙耶、翁諱正敏、字子眞淺見氏、稱又兵衛、巢雲其号、六世祖諱德正以善書仕德山侯、高祖諱正信始遷德山、父諱正辰、母松田氏、翁才略絶人、自經學詞藻、劍法砲術、以至余儀音律之末、莫不博綜、然其畢生精力所注者、翰墨云、仕途三十餘年、補学館句読師、撰劍法師事、除訓導兼侍講、遷判司、軼目付、皆盡稱職、屢受賞賚、安政戊午二月二十九日考終于家、享年七十有四、芝輿元寺先兆、配桜井氏、有一男四女、男即正祐、長女疾不離、次適玉井相英、次傳某公子、次適本城斐、所著有巢雲遺稿、書法纂論、德山系譜、藏于家銘曰

藝之至者道自存焉、彼局於藝、膏趾兔踰惟其道存龍蟠鳳騫、懿哉、伊人景仰、晋賢獲其神髓、百代可傳

安政七年歲次庚申春三月

巢雲軒學大義存居士

幕府儒員 安積 信撰

植崎 遂書

墓面 遠藤 衡書

石工 三牧助次郎

浅見巢雲の墓碑の筆者榑崎遂は榑崎碧溪のことで、歌人翠嶺の子で名は応（或は遂）字は子文、通称は恭蔵、碧溪は号、書法は江戸に出て、澤雪城に学び、書家を以て聞こえ弟子も多かった。徳山藩の牧香松・中村春秀（阿米・本城太華の墓碑の筆者）の後を承けてその流れをつぎ、学館に於ける最後の習書場教師であった。

資料(4) 「榑齋井上先生墓」

「先生諱孝義、通称達次、号榑齋、源姓、井上氏、其九世、快雪翁弟也、翁養以為嗣、其少也、寓我徳山藩学寮、軀幹長大有膂力、好擊劍、就小田陳剛、学神道無念流、嘉永三年先生年二十四、技大進、則奉藩主命、抵常州笠間、入鈴木氏門、修業四年、得授其八風剪紙、又抵江都、入木藤氏道場為塾長、既而帰郷、受小田氏皆傳、再赴江都、入桃井氏門為塾監遂究其境、新明智流之奥、於是歴游關東及鎮西而帰、文久元年始開道場、兼授無念流明智二術、遠近聞其名、来学者数百人、惜哉、以明治廿二年十二月四日歿、享年六十一、配河谷氏無子、門人追慕不已、相謀建石、于金砂山福田寺、請予表之、予者同寮之旧友也、不可以拒、乃提其概要云爾 青木忠蔵撰竝書」

青木西峰（忠蔵）は徳山藩士で安積良斎に学び能く詩を作る。また山陽風の書を善くす。

萩の徳山邸都合役より番頭に進む。慶応中献功隊参謀となり、後興讓館助教となり明治に入り、徳山中学校に教授し、同二四年一月一九日歿。年六四。

井上榑齋は井上快雪（本城柴巖に学ぶ）の弟で、藩校で剣道を修め、神道無念流を学ぶ。後藩命で笠間藩の鈴木氏につき四年間修業、又水戸の木藤・桃井二氏の門に在って皆塾長を勤め、帰って道場を開き無念・明智二流を授け来学者数百に及んだという。明治二〇年二月四日歿。年六一。井上より青木の方が二歳上で、四年長命だった。良斎に教えを受けた青木西峰が撰文を作り書いている。

良斎の教化は青木西峰に傳わり、帰郷後は井上との文武両道の美しい友情の織りなす出会いをこの碑文が未長く語り続けてくれる。

参考資料

生形要著安積良斎

兼崎茂樹著橙堂遺稿

徳山市史料下

増補近世防長人名辞典